

C092-006-009

①

士声明 (オーストラリア)

人類が始めて原子爆弾

の惨禍を蒙った広島に

近い竹原市に集った私たち諸分野の科学者は、一年前、

オーストラリア科学者京都会議 <sup>(が行った)</sup> 声明の意義と内容とを再確認し、

「キューバ以後の世界情勢」、「アジアの中の日本」、

「科学者の社会的責任」に関する諸報告を中心として、

三日間にわたる討議を行い、  
前回の声明

の中で指摘された諸点を含めて、さらに深く検討しまし

た。  
次の諸事項も

(一) 昨年の科学者京都会議の声明の中で、私たちは大

量殺戮兵器による <sup>(戦争)</sup> 抑止政策の危険な性格を指摘し、こ

の政策への反対の意志を表明しましたが、その後、キ

ューバの危機の日々に、  
深淵の縁に立たさ

れた戦慄すべき体験を経ました。抑止政策は最近では

移動可能な核ミサイル基地 <sup>(原子力)</sup> の性格をそな

えた潜水艦を主体とする <sup>(核戦畧の)</sup> 形をとり

つつあり、地球表面の全域にわたる基地網とあいまつ

て、世界情勢は益々緊迫の度を加えつつあります。このよ

うな状況のもとでは、世界各国の全ての民衆は、少数



世界  
の政策決定者 <sup>たよる</sup> 人質にされているといつてよいで  
ありましょう。

(二) いつ再び、キューバ危機 <sup>の如き事態</sup> が世界のいずれかの地点  
で発生しかねない、暗い情勢の中で、

私たちはともすれば <sup>絶望感に襲われ勝ちでありま</sup>  
す。しかしながら、  
正史は運命ではなく、人  
間によって作られるものであることを <sup>私達は</sup> 想起したいと思  
います。このことは例えは、今世紀の初頭と現在

と <sup>たおける</sup> という二つの時点 <sup>を比べてみれば</sup>、  
明らかに <sup>あつては</sup> 今世紀の初頭に <sup>世界の</sup> 社会改革  
の運動も民族主義の動きも、また科学者、芸術家たち

の営みも互に全く孤立し、連帯感を欠いていて、この  
事情が <sup>戦争を可能にしてい</sup>  
ました。しかるに私たちが立つ現在 <sup>科学者、芸術家、宗教者たちの努力を含めて</sup> においては、国境を越  
えた連帯感に結ばれた広汎な大衆の平和運動が国際

政治に影響を与え得るまでに育ってきています。

(三) 前回の声明において、  
私たちは戦争放棄を明記し <sup>大きな意義を指摘しました。</sup>  
た日本国憲法第九条の <sup>平和を創造するための</sup>

MIGHTY-PAPER A4

③

日本国憲法が

指針として、ますます大きな現実的意義をもつに到つ  
ていることを<sup>(重ねて)</sup>強調いたします。

(四) キューバ危機に際して、国際連合は偉大な貢献を  
しましたが、私たちは国連の将来の役割に大きな期待  
を抱くが故に、国連のあり方についてあえて二、三の  
問題を提起したいと思ひます。

国連はその憲章のオ五十一条とオ五十二条によって自  
衛権と<sup>地域的</sup>集団安全保障の権利を認められておりますが、現実  
には東西両陣営の敵対する軍事ブロックが、これに

準拠して設けられ、<sup>核兵器の存在と公然と制度化した</sup>これらの条項はあたかも冷戦と<sup>観を呈しています</sup>  
核兵器の存在と公然と制度化した<sup>たまたま再</sup>  
来年は国連設立の二十周年に当り、<sup>オ百九条の規定に基き憲章</sup> 憲章を再審議

できる代会でありませう。現在の国連憲章が核兵器出現  
以前につくられたものであることを想起し、上記のよ

うな不合理な事態を排除する<sup>核時</sup>とともに、<sup>核時</sup>  
<sup>(国連が世界平和維持のために)</sup>代に有効に対処できるように、その在り方の再検討が加えら

れるべき時期が到来<sup>迅速</sup>することを望みます。さらにまた、中華人民共

和国の加盟を実現することが国連本来の在り方に沿う  
<sup>かえりである</sup>ことを主張したいと思ひます。

MIGHTY-PAPER AA

④

(五) アジアにおいては、米合衆国と中華人民共和国との間に敵対状態が十数年にわたって続いております。この状態の存在は、アジアにおける緊張の根源であり、世界平和の創造にとって著しい障害になっております。

日本が核非武装の原則を貫き、一切の核兵器の持ち込みを拒否することは、単に日本が戦争のまき込まれる危険性を減殺するだけでなく、アジアにおける核戦略体制の恒久化を阻止するのに有効であり、世界平和に対する大きな貢献となるのであります。  
日本の

(六) 才一回科学者京都会議以後、軍縮と日本経済との関係をはじめ、いくつかの検討が進行しつつあることは、私たちを深く勇気づけるものであります。もともとと科学者の社会的責任に対する意識は、主として、原子物理学の発展とともに成長して来たものであります。しかし、平和の創造という課題に対しては、イデオロギーや方法論の違いを越えて、人文・社会・自然全分野の科学者が協力をこめて、その社会的責任を果すことが、さし迫った必要事であると考えます。

⑤

さらに、永い文化交流の伝統を持つ中華人民共和国を  
はじめ、アジア諸国の科学者の協力をうる可能性を検  
討することも私たち日本の科学者にとって将来の重要  
課題の一つであります。

(七) 今日、社会に対して巨大な影響力をもつものとな  
った科学が悪用される場合を考えると、科学者として  
責任の重大さを身にしみて感ぜざるを得ません。私た  
ちは科学の悪用を防ぐ力と倫理とが社会に振りつつあ  
ることに勇気づけられ、さらに科学者が悪の生産者と  
ならず、科学により発見された真理を真に人類の幸福  
と世界平和とにのみ役立たせるために、あらゆる人々  
と共に進みたいと思っております。